

火の穂の力

久野 昭

Written by
Akira Kuno

はじめに

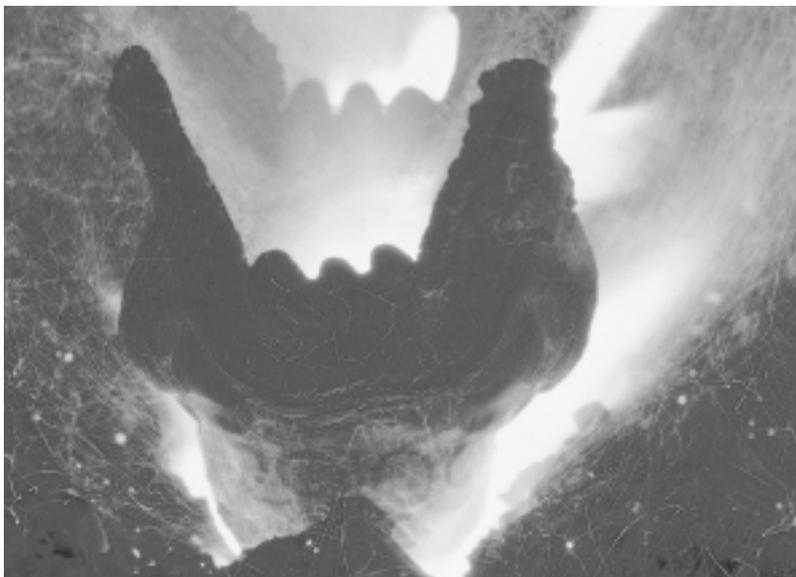
古代日本の神話では、日や月やその他の神々の母イザナミから最後に生まれたのが火神であつて、ホムスビ(火産霊)とも、カグツチ(軻遇突智)とも呼ばれている。ホムスビの水とは火であり、その火がさまざまなものをホムスビ、つまり繁殖させることから、この名は出た。カグツチの力や光がちらちらする意、チは霊である。

この火神を産んだために妻が焼け死んだのを恨んで、イザナギが劔を抜いてカグツチを斬り殺す。「こ

の時に斬る血が激しく飛び散って、たくさん石や樹木や草に染まっていた。これが草木や沙石のおのずからに火を含むことの起りである」と、『日本書紀』の一書は伝えている。「ここで沙石とは、おそらく燐をさすのだろうが、この一書の伝承者に血の色から火への連想があつたとしても、ここで語られているように、小石や樹木や草がおのずからに火を含んでいるという発想、そしてホムスビの名が示すように、火こそさまざまなものの繁殖の源とする考え方が古代の日本にあつたことは、確かだろう。もしそうなら古代の日本人にとっては、人の奥底にも火があつたと考えても不自然ではないことになる。

それはともかく、少なくとも比喩的には、激しく燃えさかる恋慕や憤怒の感情が火として表現されるのは別に珍しいことでは

ない。例えば、これは恋人への思慕ではなく、大切に飼っていたのに何処かへ飛んでしまった鷹への切ない思いなのだが、「言ふすべのたどきを知らに心には火さへ燃えつつ思い恋ひ」(『萬葉集』巻第十七第四〇二番)と詠んだ歌人もある。そして、現代の私たちも、このような表現にはほとんど違和感を抱くことはない。それだけ、私たちの心には火を受け入れる下地が



あると見てもよからう。その下地に訴えて、「火の種」の力について書いておきたい。

火改め

ホームにあるいはカクツチと呼ばれた火の祖神は、後代になると、火災を恐れ、火を鎮めようとする祭祀の対象となつた。実際、すべてのものを焼き尽くす火の破壊的な力は、私たちに恐怖を抱かせる。ただし他方では、私たちはその同じ力に罪や穢れ、一切の不浄なものを焼き消す浄化の働きを見る。だから、この国を含めて多くの宗教にとともに主要な道具立てになつていく。

主としてこの浄化力ゆえに、火は神聖なものとして崇められてきた。「火改め」と呼ばれる行事がある。火を改めるとは、火の神聖性を保つべく火を更新することである。その形態はさまざまだが、例えば、大晦日の夜、神社に集まつた氏子たちが焚き火をして、その火を火縄に移して自宅に持ち帰り、その火で新年を祝う、雑煮や粥を煮る。年が改まるのを機会に、竈の火

を更新するといつこの行事を支えてきたのは、明らかに火の神聖性の観念であろう。

だが同時に、「この火改めによつて神の火を新たに自宅の竈に迎え入れたのは、火処としての竈が家族の結びつきの中心だつたからである。つまり、改められた火が、改めて家族を結合させるのだ。それだけに、神聖な火種を絶やさないことが主婦たる者の務めでもあつた。

なお、古代には神聖な火の相続が政治的にも大きな意味を持つていたことは、例えば、出雲の国造の交替にあつては、新国造は火継ぎの儀式を行つてはじめて、その職を継ぐを得たことを伝える記録からも推測できる。

原初の「日」と「火」

ただし、火を改めることによつて新年を迎える行事が持つている意味は、ただ火の神聖性や火を中心とした家族の結合の再確認だけにとはとまるまい。それだけでは、この行事と新年との結びつきは説明しきれないはずである。

「あけましておめでとつ」とは新年の挨拶の決まり文句だが、「あける」とは、明ける「でもあれば、開ける」でもあつて、そこには暗く閉じこめられていた闇の状態から、明るく開かれた光の世界への、転換の喜びが表現されている。一般に古



フェニックス
中国・唐代の黄金製髪飾り

代人は天地開闢・天地創造以前の段階として、ものの形の一定しない混沌とした闇を考へていた。その闇の中に光が登場する。確かに、その登場の仕方は民族によつて異なり、例えば、古代イスラエル人の世界では、「光あれ」という神の言葉によつて光が出現するのに対して、古代ギリシア人の世界では、夜が闇に産み付けた卵が自然に割れることで光が登場する。そういう相違はあるが、闇の中に光が登場することで天と地が分かれ、ものの形ができあがつていくのが、宇宙開闢・天地創造神話の基本的なパターンであつて、その原初の光の勢いによつて、それまでの闇の中に蠢いていた魔物も追い払われるのである。そして新年の儀礼は、一般に、この神話上の宇宙開闢・天地創造の再現という意味を持つていた。

元旦に初日の出を拝む習慣は、それが毎日反復される日の出とは違つて、宇宙開闢時の光の出現と同質であることに基づく。現在に残る節分の鬼やらいの行事は、初めて登場した光が闇の中で蠢いていた魔物を追い払つたという神話上の出来事の再現である。とすれば、大晦日に改められる火にもそれなりの意味があつていい。それに、

言語学上の議論はともかく、発想の上では、火(ひ)には日(ひ)に通じるものがあるのではないか。

火によつて蘇る鳥

ここで、主として三世紀から四世紀にかけてのキリスト教護教家ラクタンティウスの作と伝えられている『フェニックス賛歌』によりながら、不死鳥フェニックスの神話の中核に絡む火の再生力について述べていきたい。

フェニックスの名はギリシア語のポインクス(真紅)に由来する。ヘシオドスの断片やオウディウスの『転身譚』やタキトウスの『年代記』などにもこの鳥についての言及があるが、<ロドトスの『歴史』第二巻の記述が比較的詳しい。彼の伝えるエジプトの伝承によれば、この聖なる鳥は五百年ごとに父鳥の遺骸をヘリオス神殿に葬るために、アラビアからエジプトのヘリオポリスに飛んでくる。この記述ではまだフェニックスは不死鳥にはなっていないが、この鳥が五百年を生きたこと、ヘリオスが太陽神であり、ヘリオポリスが太陽の都を意味することは、注意す



ポンペイの壁画に描かれたフェニックス
(123×124cm)



祭壇
フランクフルトの出版業者のトレードマーク
(1540年代)

べきだろう。フェニックスがやがて、数世紀を生きた後に自らの巣に自ら火をかけて、その火焰の中で自らを焼き尽くし、その屍灰の中から若やいだ鳥となつて再生する不死鳥になつた裏には、明らかに太陽信仰がある。

『フェニックス賛歌』も、太陽の森に棲み、日の神に仕える鳥としてフェニックスを紹介するところから始まる。千年を生きた後、この鳥は太陽の都を去つてフェニキアの地に飛び、この鳥ゆえにフェニックスと呼ばれる樹を選んで、芳ばしい草や灌木などを積み重ねて自らの巢を造り、そこで死を待つ。いつしか鳥の肉体は死によつて破壊されて、灼熱する。その熱は炎を生み、はるか上天の火焰によつて点火する。遺体は赫く輝き、燃え尽きて灰になるが、その灰はあたかも水気によつて一つの塊に集められたかのように合はさつて、一種の種子になる。その種子から初めは乳色の虫が生じ、時満ちると虫が巨大な球形の卵の姿になるが、その殻を内から破つて立ち現れる鳥は、かつての若きフェニックスである。鳥は天の神酒によつて育ち、青春を迎えると、かつての自分の身体の遺物である骨や灰や殻を集めて香油や没薬や乳香の

内におさめて、嘴で球状にまるめたのを爪で掴んで飛び立ち、太陽の都へ急ぐ。

この火焰の中で焼き尽くされ死にながら、その自らの屍灰から再生するというフェニックス神話を、ラクトニティウスを含めてキリスト教の教父たちは、復活の教理を説くのに利用した。ただし、火による死と再生というこの神話の基本的構造は、おそらくキリスト教という枠を超えた普遍的なものではないであろう。火によつて浄化された魂が至福の上天に戻っていくという発想も、キリスト教だけのものではない。

生命の源泉としての火

日本の習俗としての新年の火改めも、地上で新しい年ごとに改められる火と、天空に輝く火である太陽とのつながりを想像させるものであったが、フェニックス神話の場合、地上でフェニックスを焼き尽くす火と、屍灰の中から再生したこの鳥が仕えるべき天空の火とのつながりは、歴然としている。このよつなつながりの中で火の創造力・再生力が発揮される例は、他にも数

多いのである。

例えば、バラムン教徒は祭火壇を造つたが、その祭壇に燃える火は、すでに紀元前千二百年前後の『リグ・ヴェーダ』にも登場している火神アグニの臨在を示す。アグニは太陽として天空にあるとともに、祭火として地上にもあり、また家ごとに賓客として迎え入れられつつ、人間の捧げる供物を天の神々のもとに届ける仲介者であつて、浄化の働きや新生と活力と光明と知恵を保護したり提供したりした。

この祭壇の建立について、エリアーデは『永劫回帰の神話』の中で、「バラムン教の供養のそれぞれが、世界の新たな創造をあらわしている。実際、祭壇の建立それ自体、世界の創造と考えられている。粘土をこねる水は、原初の水である。祭壇の土台として用いられる粘土は大地である。側面の壁が空気をあらわす、という具合である。さらに、祭壇を構成する各層には、創造されたばかりの『コスミックな領域を確定する章句がともなつている』と書いている。私は、五層とも七層とも伝えられるこの祭火壇に生命の源泉としての火が点じられることで、世界の新たな創造を復元する業が完結したと思う。



© 樋口 徹 / PPC

火による破壊と再生

ところで、祭火壇を造つたのは、インドのバラムン教徒だけではない。イラン高原のゾロアスター教徒も、また祭火壇を建立した。彼らは火を不可視の神の地上での可視的な表現とみなしたが、それは火が地上で太陽と同じように光と熱とを提供することによつて、それ自体が太陽を、それゆえにまた神を代弁しえたからである。ゾロアスター

一教の拝火神殿の祭壇で、アフラムスタの臨在を示すべく絶えず燃えている神的な火は、その光と熱とによつて、生命と成長の源泉でもあれば、生命の息吹そのものでもある。そして、神殿の祭壇の火と家庭の炉の火とを問わず、それが火である限り聖なる存在であつたから、その火を保ち、焰を絶やさぬようにすることが、ゾロアスター教徒の神聖な義務であつた。

この宗教では、世界は善神アフラ・マズダと悪霊アーマンとの激しい闘いの場であり、歴史は第一にアフラ・

メタによる霊的創造の時代、第二に同じく物質的創造の時代、第三に善悪混合の時代、そして最後に善神が勝利をおさめる時代に区分される。そして、善神が悪霊を征服することによって歴史は終結するのだが、その時大火災が起こる。「世界の終末に際して、あらゆる存在を業火の試験が見舞い、溶けた金属の洪水が流れ出て、そのなかであらゆる悪が焼き尽くされるが、善はなんらの被害も受けずに残るであろう」と、教典『ヤスナ』は述べる。やがて火と灼熱とによって溶けた金属が、「この地上に河のごとくとどまるであろう。その時、あらゆる人間はこの溶けた金属を通り抜けることで浄化される」。そして、この浄化の後、もはや悪魔も刑罰もなく、邪悪な者の落ちるべき地獄も存在しない。

この終末論的な文脈で述べられている終末の業火は、祭壇の火と別個のものではない。アフラマズダの臨在を示す火への供養は、終末論的な試罪と、この最終的局面での教徒の再生にひらなるのである。

火の穂の揺らぎ

もし火によって地上から天空への回路が確保されるならば、死んだ者の魂が、立ちのぼる火焰とともに天に送られるとしても不思議

ではない。そのような発想は火葬の普及した後の日本にもあった。だが、その魂は一直線に天を目指すではなかった。

なぜなら、火焰は天と地をつなぐかのように天空を目指しながらも、常に揺らぐ。それは光と熱を発しながら、一定の形態にとどまることをしない。焰が生じさせる煙もそうである。それは揺らぎ漂いながら、いつしか薄れつつ、天を目指す。地上にある者には、火焰の天への到達は確認できず、ただそれを想像するのみである。もともと、想像というものは、常にこの火焰のような揺らぎと漂いとをともなうのである。

の間で揺らぐことになる。どちらか一方に固定されたところからは揺らぎは出てこない。焰が「ほのほ」と訓まれたのは、それが火(ほ)の穂(ほ)を意味するからだ。しかも穂とは稲穂や山頂のように突出した目立つ部分のことだが、この火の突出には固定的な形態はなく、常に揺らいでいる。また、だからこそ火の穂には、私たちを想像の領域に、さらには創造の世界に誘う穂があるのではないか。確かに現代の慌ただしい日常生活の中では、火の穂をじっと見つめる機会も稀である。だが、逆に稀なればこそ、この穂の揺らぎに合わせて心を想像の世界に漂わせることで、日常的な習慣を超えた地平に出てみてもいいのではないか。

久野 昭(くの・あきら)

広島大学名誉教授・国際日本文化研究センター名誉教授。一九三〇年東京生まれ。京都大学文学部哲学科卒。東洋大学教授、広島大学教授、中京女子大学アジア研究所所長を経て現在に至る。専門は哲学、比較思想。著書は、『鏡の研究』(南窓社)、『葬送の倫理』(紀伊国屋書店)、『日本人の世界観』(吉川弘文館)、『日本にきた達磨』(南窓社)、『火の思想』(理想社)など。



高野山真言宗長岳寺に伝わる「極楽地獄図」の中に描かれている「火の地獄」

焰それ自体、一方では一切を焼き尽くす破壊、ただし他方ではその破壊を通じての浄化と創造という、相反する可能性の間を揺らぎ漂っている。それに応じて人間の方も、例えば、鎮火祭と火改めの神事という、相反する対応